

# 群弓連だより

令和8年3月

127号

群馬県弓道連盟

発行人 勅使川原 守

## 第四回 【先生、お話聞かせて！～特大号～】

今回は群馬県弓道連盟名誉会長、須田定雄範士八段にお話をお伺いいたしました。須田先生におかれましては群馬県弓道連盟会長、国際弓道・全日本連盟理事などを歴任、国内外での弓道発展のご尽力を認められ、2020年秋の叙勲「旭日双光章」を授与されておられます。長年弓道に携わってこられた先生だからこそそのお言葉はとても考えさせられましたが、その飾らないお人柄のおかげで楽しくお話をお聞かせいただきました。また、貴重な資料をご持参いただき、その資料を基にお話しただけしたこと、感謝申し上げます。大変貴重な時間を過ごさせていただきました。皆様にも須田先生のお人柄をより感じていただきたく、今回はインタビューのまま(口語)にて記載いたしました。

=====



【須田先生】皆さん若い方たちは群馬県の中の私しかあまり知らないと思うので、まずは過去どんな事をしてきたかの自己紹介をしますね。

私は平成19年から国際弓連の理事、22年から全弓連の理事、なおかつ総務会長、総務部長という形で諸々のことをやってきたんだけど、第一回の国際弓連の設立大会の全体のまとめ

なんかもやってね、これがとにかく大変だった。

初めての事だったし、いろんな偉い人と大喧嘩したり、あんまり外で話せない話も多いので細かい話は出来ないんだけど。とにかく資金の捻出問題や会場準備など、問題は山積みなのに大会までの時間がなくて大変だったんだよ。

それなのに一部の偉い人があまり協力的ではなくて途中で頭にきすぎて啖呵切って辞めるところだったけど、先生達になだめられて、大変だったけど頑張って最後までやり遂げましたよ。

### 目次

先生、お話聞かせて！～新春特大号～… p1～p6

編集後記、お知らせ…p6

逆に仲違いしてしまった先生の仲を取り持つのに範士の認許状を預けて、万が一この国際大会がうまくいかなかったら全弓連に認許状お返しします！という覚悟で間に入ったこともあったね。まあそんなこと何回もやったんだけど。

冗談はともかく、何かあったら全責任を私が負う覚悟でしたよ。

その時、皇室の高円宮久子妃殿下が名誉総裁だったので、大会のパーティーのご挨拶の後に妃殿下が「別室でお食事をご用意いたしましたので、私が奢りますから」と労ってくださったので、国内外の主だった先生方とご馳走になったんだよ。

妃殿下もその当時、浦上先生の道場にお通いになっていらしたので、冗談で「来月京都で大きな大会が開催されますので矢渡しをやっていただけませんか？」ってお誘いしたんですが、流石にそれは叶わなかったですね。

国際弓連の問題が一段落したと思ったら、今度は全日本弓道大会（京都大会）が会場として使用していた皇宮警察の道場（京都御所内：済寧館弓道場）が使用できなくなってしまったということで、どこかいい場所はないかと相談を受けて、会場確保のために奔走したんだよ。

現在の【みやこめっせ】にあたりを付けて交渉しようとしたんだけど、10年間などの長期契約はできますかと訪ねたら、1年ごとの契約しかできなくて。しかも2年前に申請を提出しないといけないって言うんで、じゃあ毎年すぐ申請を出してそれをずっと継続していくことで、

優先的に会場を押さえられるように持続的に申請を出して、会場を押さえる段取りをしたんだよ。

さらに5月の京都って言うのは結構暑くてね、閉め切りの会場ではかなりしんどい。

「じゃあエアコンを使用して良いですか？」って言ったら「1時間〇〇円です」って言われて…。それじゃあとんでもない金額になっちゃうから昼前1時間だけ付けるってことで切り詰めたんだけど、それでも莫大な金額になってしまっただけ。

でも、今まで同じ時期に済寧館と武道館で別々で行っていた審査と京都大会を【みやこめっせ】なら一箇所でするし、単純に目先のお金がかかって無理！っていうんじゃなくて、全部ひっくるめて考えてくださいって先生方に提案して。京都で理事会を開催してもらってその目で会場を視察してもらったり、事前に仮組みしておいた大会と審査会場の設営設計図を見せて納得してもらったり。会場設営のイベント会社も探して相見積もり取って京都のフジヤさんというイベント会社にお問い合わせすることになったんだけど、大会開催3年目までは設営準備が終わって各場所の確認など深夜までやったりしたんだ。今はもう滞りなく行えてるようで安心してます。

それが済んだら今度はその当時全日本弓道連盟で使用していたシステムが、まあ入札時から色々問題がすでにあって、全弓連のシステム使ってませんっていう地連が13もあって。どういうことだ？って調べたら、全国に称号者は何人いるか？の問いかけにも正確な人数をPCで出すことが出来なくて、こりゃどうにかしないとけないって言うので、システムのことなんか全然わかんないのにそれも引き受けて。その当時ITに



資料を沢山用意してくださり  
お話をいただきました

精通した会員に委員になってもらって、もう一回システム入れ直すことになったんだよ。

将来的にもっと色々運用の幅を広げられるようにシステムを改良してもらったりして良いものを導入できたんだけど、本当はその後も2, 3年おきにシステムの更新をしなければいけないのに未だにその当時のまま運用してるんだよ。

群弓連が今使ってるシステム、その当時のそのままなんだよ。本当はもっとデータを入れられるようになってるはずなんだけど、更新されてないんだよなあ。もったいないねえ。まあ結局、誰もやりたがらない、誰もできなそう！っていう問題を解決するのが好きなんだよね。

=====  
私は弓道を始めた最初の1年くらいは巻藁しか引かなかったんだよ。的前は引かせてもらえなかった。でも今となってはそれがその後の弓道人生を形成したと思うよ。仕事が忙しすぎて眠れない日々が続いて、仕事から頭を離すための巻藁だったんだけど、ちょっと巻藁引くと頭がクリアになって、仕事で悩んでたことが解決したりするんだよ。

春から始めて、的前に立たせてもらったのは1月で、じゃあ県の射会出てみるか？って言われて2ヶ月後の射会に出て8射7中で優勝競射まで行って負けて、ほんと悔しかったんだ。

それからは五段までは審査落ちたことなかったんだよ。ちなみに弓道始めた25歳のとき18kgの弓からスタートして、四段で27kg、38歳で32kgの弓を引けたんだよ。

六段の審査を受けるときは東京だったんだけど、(※この当時は錬士の前に六段を受けるのが普通だった)その時、私しか平五段で六段の審査受けたのがなくて(実は仲間は錬士を先に受けてた)。でも平五段から受審したのが197人中、私を含めた2名しか受からなくて、錬士から受けた仲間は全員落ちてた！まあ自慢なんだけど…。

錬士受ける頃になると審査受けるの嫌で嫌で仕方なかった。その頃は弓道仲間で車持ってたのが私だけだったんで、仲間を連れて行くついでに仕方なく審査受けてたんだ。弓道始める前に足に大怪我をして、手術してもあまり良くならないって言われて、審査で跪坐してると痛くて痛くて…。宇都宮で受けたとき一次審査は受かったんだけど、二次審査が原則の間合いで「もう無理！」って思っちゃった。

でも次の審査でどうやったら足が辛くないか？って考えて、体重減らせば楽なんじゃないか？と思って2ヶ月しかなかったんだけど9kg減量したんだ。25分間、原則の間合いを我慢することなんて、2ヶ月近くご飯も食べずに我慢したことより辛いはずはないだろうと思うと我慢できたね。だけど仕事やるには御飯食べないわけにはいかないんで、審査の時だけ頑張って減量してた。でも減量が伴うから審査は本ッ当に嫌いだった。

その数年後、群馬国体(昭和58年あかぎ国体)で、納射の介添に私の名前が上がって、だけど錬士で介添なんて国体ではあり得ないから「国体までに教士取って」って。「じゃあ教士の先生でいいじゃないですか!？」って言ったんだけど「もう決めちゃったから、取って！」って。で、時間的にもう京都での審査しか無いから夜行列車で行ったん

だけど仕事も忙しくってどうしてもその日に帰ってこなくちゃいけないんで、審査終わって日帰りのトンボ帰り。

群馬では私と富岡の松井さんが教士に合格して、みんなは泊まりでお祝いの宴会してくれたんだけど、私は受かったのに帰っちゃったもんだからみんなに怒られて怒られて…。そのメンバーにその後3年間宴会代をねだられ続けたんだ、まいっちゃうよね。私は主に五段までは群馬県弓道連盟の会長をなさってた加藤勝人先生に見ていただいて、五段以上は勝人先生と一緒に齋藤範士の道場へ通っていたんだけど、齋藤道場では【男子は会：15秒、女子は10秒持つこと】と大きく掲げてあって。当時27kgを引いていたんだけどさすがに15秒持っていられなくて25kgの弓を注文し直したんだよね。

私が範士になって全国の道場をまわるようになってくると中には会がとても短い人が結構いるんだよね。「もうちょっと持て！あと一秒！もうちょっと！」って言っても全然持っていられないんだ。

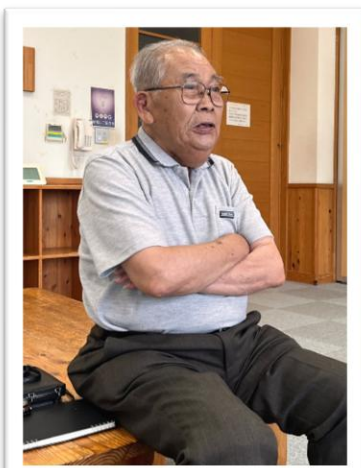
なぜそのあとちょっとが持てないんだろう？とその人の気持ちを理解するために、じゃあ早気になってみよう！と自分の会を短くする努力(?)をしてみたんだ。早気になるまで2年半かかったんだよ。その当時は私は12秒くらいの会の長さだったんだけど、口割りついたらぱっと離せるようになるまで2年半。

そこでわかったのは【的は鏡】と言われているように、早気の人のは的しか見ていないんだね。12秒持っていた時はじっくり自分を見ている時間があったんだ。

齋藤道場ではなぜそんな長い時間会を持たなくてはいけないかという、色々な物の見方があるんだけどやはり省みる時間、自分と対話をする時間を最初から与えるためだったんだなあという事を再確認できたね。だけどそこから12秒の会に戻すのに更に2年半かかったよ…。前と同じ充実の12秒ではなくなってしまっている様で、元に戻すのに時間がかかっちゃった。

そんな一見無駄に見える無駄じゃない時間も大事でしたね。

私はいつでも自分をなげうっても構わないと心掛けています。要は何をするにも覚悟が必要ってこと。



私のホントかどうかかわからない与太話はこれくらいにして、全弓連のこれからの次代に向けた話をしてみましようか。

今高校生で弓道を始めて大体各地連が初段くらいを取らせて卒業するんだけど、1年間に高校弓道を経験して卒業する高校生が約1万人くらいって言われていて、群馬県だけで言うとだいたい500人ちょっと。弓道人口が今減少傾向にあるんだけど、高校生はだいたい横ばい。

少子高齢化で子供がどんどん少なくなってきてるから絶対量として高校弓道人口が横ばいで推移するわけではなく、これからガクッと減っていくよね。社会人はもっと減っ

ているんだ。じゃあなぜこの対策をやっていかないんだ？ってことだよな。

全弓連っていうのは会員を持たない団体で、みなさんは各地連の会員だよな。その当時の全弓連は十何年来ずっと赤字で、このままでは折角申請した公益財団法人として存続できなくなっちゃう。

これ言ったら皆さんに怒られるかもしれないけど、今みなさんにお支払いして貰ってる全弓連の地連分担金を決めたのは私なんだよ。会員を持たない団体なので会費を徴収するわけにいかなくて、皆さんに協力してもらいましょうっていうお金を分担金として払っていただいています。

（編集部注：分担金は均等割及び実績割の合算で、実績割は「当該加盟団体における登録会員数に係数を乗じ得た額」があり、令和7年度の係数は2,000円となっています。）

だけど毎年1500人くらい減っていくっていう計算で、人口が減っていくことは分担金だけじゃいずれ崩壊してしまう。

では弓道人口を減らさないためにはどうしたら良いか？って言ったら、例えば現在60歳の方が高校・大学で弓道をやっていたと、いう人の数が大雑把全弓連対象で44万人、群弓連対象で2万人くらいの潜在人口があって。当然現在も続けていますという人もいますが、概ね60%から、地域によっては90%の方は弓道をやめている潜在人口となっているんだよね。この人たちを呼び戻すためには、ちゃんと呼びかければかなりの人数戻ってきてくれるんじゃないか？各支部にいる称号者、特に教士クラスの先生に協力してもらって月に2回くらい支部の講習会をやったりして低段者をターゲットに全体のレベルの底上げができるんじゃないか？と私は思うんだよね。

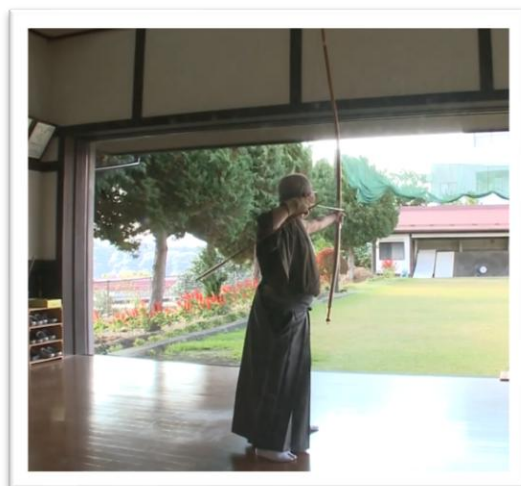
ただ昔ながらのやり方でやったんじゃダメなんだよ。もっと今の時代やパーソナリティに沿った新しいやり方があると思うんだよ。その人その個人にあった指導をしてあげないと、やっぱりできなかつたりすると楽しくないし嫌になって辞めちゃう。

本当に弓を辞めてほしくないんだよ。先ほど言った弓道人口が減っていく中で、赤字を補填するためにも付け焼き刃ではあるけれど合格率を上げていかないといけない。これがどういう事を意味してるか皆さんはわかりますよね？

一般スポーツでは指導者の数が競技人口の10%から15%くらいが望ましいと言われていて。武道にあっては10%くらいの指導者の数が望ましい、と思われるんだけど、初心者教室を経た人達にとっては偉い先生達がいる時間にはふらっとお稽古に行ってみよう！って気にはならない雰囲気はどうしてもあるよね。それで通える時間帯が合わなくて辞めてしまう人もいます。

実は初心者・低段者にとっては雰囲気っていうのは継続していくうえでとても大事な条件

なんだよね。本当はそういう人たちにたくさん残ってもらいたい。そうしたらこの現状



がもう少し良くなるんじゃないかなあ？と思います。老若男女を一緒くたに指導するなんて、この時代において時代遅れだなあと私は思うんだよ。

今は令和で、〇〇ハラスメントに気を配らなくてはいけない時代なんだし、より効率よく、より分かりやすく、より理解しやすい条件をどんな形で提供していこうかという事を常に考えていかないといけない。技術論には根拠が必要で、すべての指導に根拠を示さなければいけない。

どの筋肉をどのように使うのか？ちゃんと理解をさせてやらせる場合とそうでない場合、より筋肉を有効に働かさせる説明があるのと無いのと教わる側の理解に大きく差が出る。これがより効率的に、という指導法なんだね。結果として、心身ともに健全で年齢を得れば得る程健康でバランスのよい弓道人を作ることだと思う。

自分が育った教わった時代の話をつつまでもしてはいけないんだよ。

これはやはり称号をお持ちの皆さんは教える資格をもらったんだから、沢山勉強していただき常に考え方を刷新して同じ内容でも教える相手のレベルや条件によって指導方法は変えなくてはならないという事をよく理解して、弓道界の未来まで考えたご指導をお願いしたいと思っています。

## 編集後記、お知らせ

好評企画「先生、お話し聞かせて！」は満を持して須田先生にご登場いただきました。私も取材に同行したのですが、5時間超えの熱いロングインタビューとなり誌面には載せられない秘密の話も盛りだくさんで、編集にも大変時間がかかってしまいました。（全部載せたらたぶん3倍のボリュームになります）

須田先生、貴重なお話を本当にありがとうございました。

さてこの企画は今後も継続していく予定です。実は須田先生にご登場いただくと「先生の後では恐れ多くてとてもとても私などでは」と皆さん遠慮しちゃうんじゃないかなと危惧しています。そんなことはありません。先生方の貴重なお話を会員の皆様にお伝えできることは後進の育成にもなり、後世に残す良い機会だと思います。ということで「ぜひこの先生のお話を聞いてみたい」というリクエストがありましたら、システム部会までご推薦ください。

また、当初どこまで続くかわからない企画だったので、本来であれば第一回目にご登場いただくべき先生であることも重々承知の上、3回目までの先生には図らずも露払い的なお役目を担っていただくことで、今回の須田先生の回が実現できたのだと思っています。中橋先生、高橋先生、吉澤先生のおかげでここまで続いた企画になったと思います。あらためて感謝申しあげます。

### 【お詫びと訂正】

前号（126号）の記事中、田中義裕先生のお名前を間違えて記載してしまいました。大変失礼いたしました。HPには訂正版を掲載済ではございますが、今号と一緒に126号の訂正版を配布いたしますので、差し替えをお願いいたします。

システム部会：齊藤昌之、稲葉愛、村上拓也、渡部安希子、山口裕子、中条順子、長岡麻子